

咆哮する沈黙：記録から文学へ

—*Beloved* と *The Women of Plums* の場合

風 呂 本 惇 子

＜語りなおされる奴隷体験＞

1856年の冬。ケンタッキーから17人の逃亡奴隷集団が凍ったオハイオ河を徒歩で渡ってシンシナティへ到着した。1850年制定の「逃亡奴隷法」では、自由州に逃げこんだ奴隷は、追いかけてつかまえば連れもどせることを奴隷所有者に保証していたし、逃げてきた奴隷をかくまう者も罪に問われることになっていたから、奴隷州と自由州を分けるオハイオ河を渡りさえすればすむわけではなかった。人数が少ない方が人目につかぬだろうと判断し、9人は知り合いの手引きで安全な隠れ家に向かい、夜になるとすぐに秘密の援護組織「地下鉄道」のメンバーに導かれ、町を出て無事にカナダへ逃げのびた。残り8人は別の知り合いの家へたどり着いたが、あちこちで道を尋ねたのが災いして、その家は追っ手の一団に包囲されてしまった。

8人は家族だった。サイモンとメアリの夫婦、その息子ロバートと妻マーガレット、そしてこの若夫婦の子供が4人。他の仲間との別行動を決めたのは、幼い子供連れで動きが遅れがちだったためかもしれない。彼らは武器を手に勇敢に闘ったが、ついに銃を持つロバートがつかまってしまった。望みを断たれたマーガレットは、卓上の包丁を握ると子供の1人ののどをかき切ったうえ、他の3人の子供たちと自分自身の命を断とうとした。が、押さえられてしまった。彼女は左額と左頬に「白人になぐられた」という傷跡を残す22～3歳の混血女性。裁判の間腕に抱いていたのは9カ月ほどの女の赤ん坊、足元で遊んで

いたのは4歳と6歳くらいの男の子たちで、殺されたのは色白のきわめて美しい幼女だった。

オハイオ州知事はマーガレット・ガーナーの命を救う意図をもって、殺人罪で身柄を拘束しようとしたが、結局連邦法である「逃亡奴隷法」を楯に、所有者は彼女を南部へ連れもどす船に乗せてしまった。この船が遭難し、彼女は子供とともに（*The Liberator* の記事では子供は単数になっている）水中に投げ出された。助けあげられ、子供の溺死を知らされると狂喜したという。また一説には、遭難の騒動にまぎれて子供を水中に投げこみ、自分もあとを追ったのだが、彼女だけ引きあげられてしまったのだともいう。どちらが真相にしろ、人々が最後に目撃したマーガレットの姿は、引きあげられた救助船の上で、毛布にくるまり、ストーブのそばにうずくまる ‘wild animal’ のようなそれであった。後に深南部へ売られた彼女が死んだことを知らされた時、夫のロバートは「あれはついに逃れたのです」と語ったという¹⁾。

以上がマーガレット・ガーナーの子殺しの実録要旨である。この母親が泣き叫んでいたとも、のろっていたとも記されていない。だが野生の動物のようにうずくまったその姿の、誰をも寄せ付けぬ深い沈黙から、耳を聳せんばかりの咆哮が感じとれよう。この沈黙の咆哮に耳を傾けた黒人女性作家による文学作品が、1980年代に二つ現れた。ドロレス・ケンドリックの詩集『すもも色の女たち』（*The Women of Plums*, 1989）と、トニ・モリスンの小説『ビラヴド』（*Beloved*, 1987）²⁾ である。もちろん、モリスンやケンドリックの前にも、さまざまな実録を基にして、しかし実録には記されていない無言のうめきを行間から聞きとったり、家族の語り伝えから推測したりして、いわばあらたな「奴隷体験記」を紡ぎだす作業をした作家たちはいる。確かに、ガブリエル・プロッサーの反乱の史実にもとづいたアーナ・ボンタンの『黒い雷鳴』（*Black Thunder*, 1936）から、曾祖母をモデルにしたというマーガレット・ウォーカーの『ジュビリー』（*Jubilee*, 1966）³⁾ までの空白の30年間は、この期間、黒人社会の一般的傾向ができるだけアメリカの「主流」に同化することであり、屈辱的な

過去をあえて思い出そうとはしていなかったことを示している。だが、公民権運動が盛んになって歴史への関心が高まるや、奴隷体験記形態の作品は次々に登場した。1970年代はアーネスト・ゲインズの『ジェーン・ピットマン自叙伝』(*The Autobiography of Miss Jane Pittman*, 1971)、ジョン・オリヴァー・キレンズの『大いなる朝』(*Great Gittin' Up Morning*, 1972)、アレックス・ヘイリーの『ルーツ』(*Roots*, 1976)、イシュメイル・リードの『カナダへの逃避(飛)行』(*Flight to Canada*, 1976)、オクテイヴィア・バトラーの『絆の召喚』(*Kindred*, 1979)、バーバラ・チェイス・リボーの『サリー・ヘミングス』(*Sally Hemings*, 1979)、そして80年代に入ってシャーリー・アン・ウイリアムズの『デッサ・ローズ』(*Dessa Rose*, 1986)。

これらのうち、パロディであるリードの作品を除けば、ヘイリーまでは資料や聞き書きに忠実な、きわめてリアルな過去の再現だった。しかし、その後の世代は、「史実に忠実」に過去を知るという緊急の課題がある程度満たされたからであろうが、SF ふうなタイム・トラヴェルで現代の黒人に奴隷制を体験させるバトラーにしても、巷に流布するうわさだけを頼りにトマス・ジェファソンの愛人だった奴隷の生涯を構築したリボーにしても⁴⁾、二つの互いに無関係な実録の断片を一つにつなぎ「過去の可能性」を描いたウイリアムズにしても⁵⁾、実録に制約されぬ斬新な構想と自由奔放な想像を特徴にしている。また、どの作品も奴隷制を女性の視点から描いているところが共通である。モリスンとケンドリックの作品も、まさにこの系列に入る。18～19世紀に書かれた「本物」の奴隷体験記は6千余り、出版されたものは100余りと聞いているが⁶⁾、そのうち女性の手(声)によるものはわずか1割強だという⁷⁾。この数字は、逃亡に成功して体験記を書く(あるいは口述する)ところまでいけた女性がいかに少なかったか、言いかえれば、女性の逃亡がいかに難しかったか、したがっていかに多くのことが語られぬまま闇に埋められていったかを示している。だからこそ現代の黒人女性作家たちは、女性の視点で奴隷制の日々を語りなおそうとするのだ。

＜自由への軌跡——『すもも色の女たち』＞

この詩集がマーガレット・ガーナーの子殺しの実録を発端にしてできたものであることは、ケンドリック自身が筆者に語ってくれた⁸⁾。事件の後半部を記す資料に初めて出会った時、南部に連れもどされる途中で溺れる子供たちを見殺しにすることを選んだ母親の心に、ケンドリックは思わず声を貸した。それが“Peggy in Killing”という五パートで成る詩になった。詩のなかでは舞台が河でなく海になっているが、子供たちを投げこみ、自分もとびこんだペギー（マーガレットの愛称）は、水のなかで洗礼を施されたかのような恍惚の一瞬を覚える。

主よ、わたし、すっかり浄められました！
波が寄せてきて
わたしの乳房にあたり
わたしを越えてあの子たちのところへ行く
わたし、お乳を吸わせているみたい
海がわたしのお乳
わたしの元気な子供たちが吸っている
健康で暖かく、いつまでも

この母親はひもじさを目に浮かべてじっと待っている幼な子たちに、乳を与えるいとまもないほどこき使われてきたのだ。子供たちの頭を押さえる彼女には、彼らが水面下で養分を吸って開く花のように見えたのであろう。水から引きあげられた後のペギーは、現実を認識しようとしないう。

わたし、死んでいる。

死んでるのわかるわ、だって幸せなんだから。
子供たちもう花になっているわ、
喜びと希望の水に浸されて。
あの子たちの美しさを思うと
体が震える。
わたし、泣けないわ、だって死んでるんだから。

これに触発され、彼女は奴隷制下で黒人の女たちが経てきたさまざまな体験を、その女たち1人1人に代わって自分の声で語ってみたいとなった。そして元奴隷とのインタビュー、*The American Slave: A Composite Autobiography* (全19巻、1972)を含むいくつかの資料を読んでいるうちに、次々に詩がわき出てきたという。彼女はその頃の自分を「霊媒のような気がした」と語ったが、それはアリス・ウォーカーが*The Color Purple* (1982)を書いた後の感想とまさに同じである⁹⁾。

ケンドリックはわき出てきた詩を集め、その冒頭に黒人史の資料で時折出会う19世紀前半の南部白人農園主の買い物リストを配置した。リストには家畜や家具と並べて「黒人女1人と子供」という項目がある。この後に続く34編の詩を1人1人の女奴隷の声で語るにより、作者は品物化させられた「黒人女1人と子供」を人間へ回復していく。アフリカから新大陸への中間航路を渡る船底の暗闇で、海に身を投げた姉を慕い、故郷を恋う少女。競売台の上で幼い娘をしっかりと抱き寄せ、群がる買い手を心のなかで激しく罵倒する若い母親。逃亡にしくじるたびに受ける鞭打ちのもとで体力も気力もしだいに衰弱していく女。子供を危険にさらすよりは、と同行をあきらめて夫だけを逃す妻。子供を奴隷の身にもどすよりは、と殺すことを選ぶ母。

むろん、ペギーとは違う形の抗議もある。いずれわが子の所有者になる農園後継者を身ごもった女主人に、流産させようとたくらむ母。あるいは、堪忍袋の緒が切れると女主人を鞭で打つ女。ケンドリックが挙げている資料の一つ、

Black Women in White America: A Documentary History^{1)を参照}には、白人を恐れさせた自分の母親を回想する元奴隷の女性の手記がある。この母親は女主人を鞭で打ったために赤ん坊と引きはなされて売られそうになると、赤ん坊を逆さにつるして買い手を脅したという (pp. 34 ~ 40)。ケンドリックはこの記録をもとに、“Juba in Fire!” という詩で、わが娘にたとえそれが死につながろうとも闘うことを教えようとする火のような精神の女性ジューバを創造した。「かんしゃく玉を抱えているんだ / あたしの魂のことさ、ぴくぴく動いて / あたしを起こす / 寒い朝には / お腹をあっためてくれるよ / 生まれたての赤ん坊みたいだね」。白人の男たちに向かって、近寄るなら赤ん坊の頭をたたきつけてつぶす、と叫んで一歩も引かぬジューバの姿は、『ピラヴド』の主人公セスのそれでもある。(セスの末っ子の赤ん坊は実際にふりまわされ、すんでのところで頭を割られそうになる)。

この *Black Women in White America* には、文字の学習を禁じられていた奴隷たちが、それでもなお白人の書く文字を盗み見て情報を得ていたという報告も載っている。文字の学習を禁じたのは、それが人間の尊厳、人間の権利に対する「覚醒」へ、そして当然「反抗」へつながることを奴隷所有者自身が一番よく知っていたからであるが、より日常的レベルでは、「通行証」を偽造させないためであり、また知られてはまずい情報を押さえるためであった。床下や窓の外で聞き耳を立てている奴隷のことには気がつかない白人も、部屋を出入りする奴隷には神経を使い、彼らに聞かせたくない部分を指で卓上に綴ったのである。だが、文字を学んでいるのを見つかれば指を切りおとされたり、鞭で打たれたりする危険を知りながらも、ひそかに学ぶ奴隷は後を断たなかった。そこで、白人たちが指で綴った文字を暗記した屋内奴隷が、ひそかに学んで字の読める誰かのところへ駆けつけ、綴りをまねて見せ、その意味を尋ね、そこから情報が広がるということが起こる。上記の資料では、暗記して走っていく係であった元奴隷の記憶力が試され、それが抜群であることも証明されている (pp. 29 ~ 30)。

ケンドリックの“Sophie, Climbing the Stairs”という詩では、ソフィーが主人夫妻の綴る文字を暗記して、文字の読めるアンクル・ジェームスのところへ走っていく。彼女はアンクル・ジェームスからピリオドとカンマの違いを教えてもらってからは、「お祈りはピリオドを使ってする / 奥様の言うことはカンマを使って聴く」。アンクル・ジェームスの考えてくれた方法に従い、階段のぼりながら数と綴りを同時に覚えようと、息を切らせながら努力する。「読み書きできるところまでたどりつくのを助けてくれるでなくちゃ / 階段なんてなんの役にも立ちやしない」。年老いた彼女があえぎつつ一步一步進む階段は、脱出の一段と難かしい状況のもとで、女奴隷たちがなお体得してきた精神的成長を象徴している。

詩集の最後は、解放令の出た後、屋敷の燭台の火を吹き消しながら、明日からの旅立ちに無限の希望を託す20歳のサディーの声でしめくくられる。注目したいのは、サディーと同年齢の、すでに夫を亡くした女主人もこの家を去ろうとしていることだ。「自分も奴隷だって奥さんは言う / 奴隷がみんな黒くて貧しいわけじゃない / 自分も自由がほしいと言う」。この白人女性と女奴隷の友情に似たものは、『デッサ・ローズ』や『ビラヴド』でも描かれており、これも80年代の、「実録から生まれた新たな奴隷体験記」に共通の特徴である。

こうして奴隷体験の各面を伝える34の声によって、集合的な「奴隷体験記」が形作られ、身体は拘束されていても魂を奪われることを拒んだ女たちの精神の軌跡の証言となっている。プラム（すもも）は、彼女たちの肌の色でもあり、「豊饒」の象徴でもある。ケンドリックはマーガレット・ガーナーの沈黙に耳をすませたのをきっかけに、扉を開いて闇のなかから祖先の女たちの強靱な魂の力を引きだした。そしてそれを相続した豊かな遺産として讃えたのだ。

＜記憶との闘い、そして鎮魂——『ビラヴド』＞

一方、トニ・モリスンの小説『ビラヴド』がマーガレット・ガーナーの実録を源にしていることは、すでによく知られている¹⁰⁾。と言っても、実録から採っ

たのは奴隷所有者の苗字ガーナー、シンシナティという土地、4人の子供（男2人と女2人）、女の子の殺害という枠だけであり、モリスンの場合は事件の後半部、すなわち子供の水死の部分は扱っていない。小説では事件は1855年の夏のこととされ、ガーナー家の農園から逃亡する女性セスは、マーガレットと違ってたった1人で、しかも4人めの子を身ごもり、背中に鞭打ちの重傷を負った状況でオハイオ河へ向かう。先に「地下鉄道」に託して逃した3人の子供、特に自分の乳を待っている女の子のもとへ、どうあっても着こうと、歩けなくなれば地を這って進む。そのうえ、河の岸边につながれた小船のなかで末の女の子を生み、高熱と疲労でずたずたになって、向こう岸に住む自由黒人の姑のもとへたどり着く。マーガレットの場合とかなり異なるセスの逃避行はむしろ、幼い子供をもつ母親奴隷の逃亡に伴う言語に絶する苦難の集大成と見なせるだろう。また、これほどの極限状況をセスに耐えさせたことによって、子供に対するひたむきな愛がいつそう強調され、次にくる子殺しの悲劇はさらに避けられぬものとなってくる。モリスンはさらに、子を殺した母が奴隷として連れもどされるのではなく、監獄に入り、釈放されてシンシナティにとどまる状況を想定する。そして子の霊と対峙しながらその後の人生を送る形にして、子を殺さざるを得なかった母親の咆哮する沈黙をほぐしていった。

『ピラヴド』に登場する奴隷、あるいは元奴隷だった人々は一様に寡黙である。ケンタッキーにあるガーナー家の、皮肉にも「スイートホーム」と名付けられた農園にいた奴隷のシクソーは、ある時から「英語には未来がない」¹¹⁾ (p. 25) と言って英語を話すのをやめてしまう。彼が母国語を話しても仲間の奴隷たちには通じないのだから、彼はおし黙って暮らしたのであろう。仲間のポールDは彼とのコミュニケーションを、「あのころはシクソーがまだ英語をしゃべっていた」という形で思い出す。そのポールDは、逃亡に失敗した時、動物がされるように口に「はみ」を入れられ、沈黙を強いられた。その屈辱の記憶が、解放された後も彼に沈黙を選ばせる。

セスの姑にあたるベイビー・サッグスはできる限り口数少なく生きている。

「自分がわざわざ舌を動かして機械のように気のない言葉を吐いてみたところで、何になる?」(p. 141) と思ったからだ。彼女は6人の男と交わることを強制され、8人の子供を生んだが末の男の子以外を全部売られてしまった。末息子ハーレと共にスイートホームに買われ、やがてハーレが休日に賃貸して他の農園で働くことを条件にガーナーから自由を買い取ってくれた。自由を得て、「森の説教師」となり、なだめはげます言葉を人々の心に滔々と注げるようになったのだが、セスの事件以来人生に何の関心ももたなくなり、ふたたび寡黙になってしまう。

1863年に解放令が出て、再建期になると元奴隷たちはさまざまなものから逃れてうろうろと放浪したが、互いに顔を合わせても通りいっぺんの挨拶以外は何もしゃべらなかった。「彼らを追い立てている悲しみを細々と語ることもなければ、尋ねもしなかった。白人のことなど、口にするのも耐えられなかった。誰だってわかっていることだった」(p. 53)。だから見知らぬ若い娘がどこからともなく現れて転がりこんできても——ビラウドはまさにそんなふうにしてセスの家に居着いてしまうのだが——家族のことや過去のことは誰も聞こうとしない。それぞれが触れるのもいやな過去をもち、必死で思い出すまいとしているのを知っているからだ。

それでも過去の記憶は人々の心のすきをついて、閉じた縫い目からほころぶようにたち返ってくる。それをこぼれ出てこないように押さえるのがセスの日々の仕事だった。彼女はレストランの調理場につとめており、コックが出勤してくる前にばん生地をこねにこねる。それは、「甦ってこようとする過去を叩きだし追い返すという、今日一日のむずかしい仕事を始めるには、最適の作業だった」(p. 73)。一方、ポールDも「昔は赤い血の通う心臓のあった場所に、さびついて閉じたままの刻みタバコの缶を潜ませ」、そのふたが開いて過去の記憶がこぼれるのを恐れている。つい思い出を語りかけた彼の恐怖を察し、セスは彼のひざを、まるでばん生地をこねるように押してはさすり、押してはさする。そうやって彼の動揺を鎮め、それ以上話があふれてこないようにする。

モリスンの語り口は、そうした人々の心そのもののように断片的で、苦渋に満ちている。

小説の舞台はシンシナティの、オハイオ河からそう遠くないブルーストーン通り124番地の家。惨劇はこの家のまき小屋で起こった。以来この家では殺された少女のポルターガイスト（騒霊現象）がおさまらない。だが、人々は幽霊には驚かない。引っ越してみようか、とセスが口にする、姑のベイビー・サッグスは「死んだニグロの嘆きが天井のたる木に届くほど詰まっていな家なんか、この国には一軒だってありゃしない。うちの幽霊は赤ん坊なんで、わしら、運がいい方だ」(p.5)と、とり合わない。ベイビーにしてみれば、まだ3人の子供が残っているセスは運がいいくらいであり、自分の場合は8人の子供が皆、幽霊になって誰かの家を悩ましているかもしれないのだ。セスの息子たちは13歳になるのを待ちかねるようにして家を出ていってしまう。確かに幽霊が家出の決意に拍車をかけはしたが、彼らは幽霊が騒がなくてもいずれ逃げ出したであろう。セスに殺されかけた記憶のなまなましい2人は、寝ている間も手を握りあっているほど母の内に潜む烈しさにおびえていたのだから。

やがてベイビーも亡くなり、セスと末子デンヴァーだけが世間との交渉も断ってひっそり暮らすこの家に、スイートホーム農園で仲間だったポールDがやって来る。事件から18年後、1873年のことだ。彼は家に入ろうとして「赤く揺れている光の円」(p.8)に捕らえられたことに気づくが、その時の反応は、「客がいるのかい」というきわめて冷静なものだ。セスはセスで「出たり消えたりよ」と、あわても騒ぎもしない。ポールDは赤い色の消えた後の空気に「すすり泣きのような気配」がしみついているのを感じる(p.10)。ポールDが来たら騒霊現象はおさまったが、代わりにビラヴドという得体の知れない娘がこの家に居着く。「地下鉄道」の元メンバーで、オハイオ河岸でセスと新生児デンヴァーを助けたことのあるスタンプ・ペイドも、124番地の家がたてていて、道路にまで聞こえるわけのわからぬ物音を、「死者となった黒人たちの怒りつぶやく声」(p.198)だと知っている。同じく元「地下鉄道」メンバーのエアも、

「ひどい死に方をした人たちは地下でじっとしてない」(p. 188) のだから、セスのところに来た娘は幽霊だろうと推測する。「ベッドの上で死ぬ黒人の数はわずかだったし……生きるに足りる人生を送った者など1人もいなかった」(p. 198) 時代である。無数の非業の死を見てきたこの人々は霊が存在を主張するのを、むりもないことと受けとめていたのだろう。

モリスンの父方はジョージアの、母方はアラバマの小作農の家族だった。どちらも今世紀の初めにオハイオ州ロレーンに移住し、彼女もここで生まれ育ったわけだが、その家庭には幽霊話を含むさまざまな南部の民間伝承が息づいていたという¹²⁾。幽霊を登場させることはもちろんリアリズムではないが、『ビラヴド』の黒人コミュニティが霊界からの交信に驚かないのは、まったくの虚構とは言えないだろう。バーバラ・クリスチャンは、19世紀に活字になった「本物」の奴隷体験記に幽霊への言及がほとんどないことにむしろ不自然さを感じている¹³⁾。奴隷体験記は奴隷制廃止運動の推進に欠かせぬ武器であったが、読者のほとんどは北部の都会に住む白人である。彼らに受け入れられやすいものである必要があった。彼らの合理精神と衝突する幽霊、迷信、夢占いといったたぐいの要素が、編者によって省かれていた可能性はある。ましてや、公的な記録にそのようなものが入ることはない。けれども、奴隷制の記憶のまだなまなましくうずく再建期の南部のほとんどの黒人にとっては、読めも書けもしない文字よりは幽霊話の方がよほど自分の心が受けとめた「真相」を表し、伝えていたのではないだろうか。

『ビラヴド』には、18年前の事件を報道する新聞の切りぬきをセスがポール D から見せられる場面がある。セスは75箇所しか単語を読めない。だから新聞記事を見ても、「自分に意味のわからない言葉が、自分のつたない説明以上に説得力を持っているとは思えない」(p. 161) のである。そこで、セスはこれまでに誰にも説明しなかったそのことをポール D に語り始める。ぐるぐる、ぐるぐると部屋のなかを回りながら語るのだが、彼女は自分の語りも円のままで終わるのがわかる。「円の中心に入っていって、尋ねている者に肝心な箇所を、ここだとき

ちんと示してやれないのだ。尋ねる方が即座にわかってくれなければ、こちらでいくら言葉を重ねても、けっして説明しきれるものではなかった」(p. 161)。「文字」は言わずもがな、「言葉」自体にセスは不信を感じている。モリスンがマーガレット・ガーナーの沈黙から聞きとった最大のものは、実はこの不信だったのではないだろうか。

だが作家は「言葉」を使ってその咆哮を「文字」に定着させねばならない。この矛盾をのり越えるために、モリスンは殺された少女の霊に成長した人の形をとらせて、この世に招き入れた。自分を慕う不思議な娘ピラウドが霊だと気づかないうちのセスは、ピラウドが聞きたがるので、「事件」よりもっと前の話を少しずつ口にするうちに、あれほどいつも痛みとともによみがえった過去なのに、自分が話したがっているのに気づく。話しているうちに、記憶の奥深くに沈んでいた自分の母のことも思い出す。当時はセスに理解できたが、今はもうわからない、皆と違う言葉をしゃべっていたこの母は、畑でこき使われていたから、セスはほとんどお乳を飲ませてもらえなかった。子供たちにお乳をくれる係の女が別にいたが、十分な量ではなく、セスはいつも満たされぬ思いだった。(ケンドリックの詩でも、ペギーの子供たちの飢えたまなざしと、死にゆく子供たちに想像上のお乳を流しおくる母が描かれている)。

セスは乳にこだわる。1855年の夏、逃亡を決行することにしていた日に、セスはスイートホームの白人の男たちに押さえつけられ、乳を吸われた。(これを目撃した夫ハーレは気が狂ってしまい、結局セスは夫の消息がわからぬまま一人で出発した)。男たちのふるまいをガーナー夫人に告げたという理由で、セスは激しく鞭打たれた。背中一面を裂かれた状態で、自分の乳を待っている女の子のもとへ、セスは凄絶な逃避行をした。18年後にこのひどい傷跡を見たポールDは「奴らは身重のあんたを打ったのか!」とくり返すが、セスは鞭打ちのことよりも「奴らはお乳を盗んだのよ!」と、乳のことを執拗にくり返す。作者はこのやりとりで、奴隷制下で女が体験した苦しみに対し、男の理解に限界があることを暗示している。(もちろんその逆もあるわけだが、なにしろ19世紀末ま

でに刊行された体験記の約9割弱は男性のものだったのだ)。

セスの回想する逃避行は凄絶なものではあったが、このうえなく美しい場面もある。歩けなくなって森のなかで倒れているセスを見つけ、一晚介抱したばかりか、オハイオ河岸まで連れて行って、セスの出産に手を貸してくれたのはエミー・デンヴァーという貧しい白人の娘だった。ずけずけとものを言う口の悪い娘だが、「逃亡奴隷法」で罰せられる危険もかえりみずセスに援助の手をさしのべたのだ。エミーのおしゃべりから察するに、彼女の母親は（おそらく英国から）渡米するための船賃を借金して、それを返すまで年奉公をしていたようだ。母の死後、まだ返却がすんでいないという理由でエミーも同じ主人のもとで奉公を強いられていたのだが、この男バディーはエミーを鞭で打ったり、火かき棒を投げつけたりするという。（それでもセスの背中を見て、バディーさんの比じゃないね、と驚く）。しかも、人のうわさではこのバディーが実の父親らしいという。肌は白いけれど、この娘が多くの奴隷の子供とほとんど同じような体験をしていたことがわかる。そしてこのはだしの白人娘とボロをまとった奴隷女は河岸で、「二人でいっしょに何かを、適切に、しかもみごとにやりとげた」(p. 84)。土手にそったくぼ地に生えるシダの胞子、すなわち無数の命の可能性をふくんだ種子の群れが、銀青色の列をつくって水に向かって漂う。河は「吸ったり飲んだりするような」水音をたてる。この場面では植物も河も命の讃歌として描かれている。エミーがオハイオ河の水のなかからとり上げてくれた新しい命に、セスは感謝をこめてデンヴァーと名付ける。

この小説には、他にも黒人を助ける白人が登場しないわけではない。農園主ガーナー夫妻は奴隷たちを信頼し、決して暴力をふるわない。ガーナー氏はハーレの願いを聞いてベイビー・サッグスを解放した。だが、腰を痛めたベイビーはもう働けなくなっていたから、そのまま置いておくよりハーレに金を出させた方が実は得だったのだ。ガーナーが急死すると、夫人はそれまで信頼していたはずの奴隷たちに農場をまかせるのが不安になって、親戚の男たちを呼びよせた。（この男たちの扱いに耐えかねて奴隷たちは逃亡を決意したのだ）。

また、シンシナティに住むボドウィン兄妹はベイビー・サッグスにもセス一家にも援助をおしまぬ親切的な奴隷制廃止運動家だった。だがデンヴァーは、ボドウィンの家に、きわめて屈辱的な黒人像の貯金箱があるのを知る (p. 255)。廃止運動はしても、彼らは黒人を本当に対等な人間とは見なしていないから、そのようなものを目にした時の黒人の痛みに気づかないのだ。このような背景のなかで、自分も虐待から逃げてきた貧しいエミーの無私的行為は、いっそう美しく見える。

美しい思い出は、ポールDの悲惨な過去にすら刻まれている。彼はスイートホーム農園からの逃亡に失敗した後、深南部へ売られ、重労働に従事させられたのだが、そこでは46人の男奴隷が毎朝千フィートの鎖につながれて仕事をするのだった。彼らは、ハイとかホウと合図をかける係の奴隷ハイマンのリードで黙々と動く。耐えられなくなって逃げ出そうとすれば、それは同じ鎖につながれている他の奴隷たちの命を犠牲にすることだから、彼らは口はきかず、たがいに目と目で「落ち着いて」と伝えあう。日がくると穴のなかにしつらえた檻へ、1人ずつ別に入れられる。ある時、大雨がつづいて仕事ができず、彼らは千フィートの鎖につながれたまま檻に閉じこめられる。穴の水かさが増し、泥がくずれ出すころ、46人はモールス信号のように鎖を引きあって意志を一つにし、鉄格子の下の泥をくぐって脱出する。「1人が失敗すれば全員が失敗する。彼らを一つに縛っている鎖は、全員を救うか、誰も救わないかのどちらかだ」という状況で、雨と暗闇をたよりに、それ以上に「ハイマンと互いを信頼して」(p. 110) やりとげる。その後の彼らを助けてくれたのは、疫病にかかったアメリカ先住民族チェロキーの一団である。その野営の近くにすわった46人に、鎖を切る斧ととうもろこしの粥を持ってきてくれ、疲れがとれるまで泊めてくれたこのチェロキーたちは、オクラホマへの強制移住を避けて、逃亡生活を選んだグループだった。これはアンドルー・ジャクソン大統領の提案により議会を通過した「強制移住法」を指しており、その移住はアメリカ先住民族の歴史では「涙の旅路」として知られている。疫病とは、かつてヨーロッパから

持ちこまれ、免疫のない彼らの人口を激減させた天然痘を指す。

北アメリカにアフリカの黒人が初めて奴隷として連れてこられたのは1619年のことである。20名の黒人が現ヴァージニアのジェームスタウンに陸揚げされた。1622年、そのあたりの先住民ポーハタン族の武装蜂起があり、白人植民者の3割近くが殺されたが、20名の黒人は一人も殺されなかったという¹⁴⁾。最も初期の段階で、先住民たちは黒人を自分たちと同じような立場の者として、白人とはっきり分けていたのである。そして先住民たちは、アフリカ黒人ほどの規模ではないにしても、やはり奴隷狩りをされ、売られていたのである¹⁵⁾。ほとんど奴隷にひとしい白人年期奉公人エミー・デンヴァー、および略奪と搾取の犠牲となり奴隷体験の歴史をもつアメリカ先住民との交流を、作者はセスとポールDの悲惨な逃避行のなかで唯一美しい記憶として描いた¹⁶⁾。

人間が記憶を封じこめようと闘っているかぎり、未来はない。おぞましい過去と真正面から向き合う試練を経なければ、記憶との闘いだけで命の力は摩滅してしまう。セスが過去を語らざるを得なくなり、ポールDも「錆びついた刻みタバコの缶」のふたを開けざるを得なくなるのは、ビラヴドが124番地の家へやって来てからだ。小説の構造上、ビラヴドは、人々の語りを誘い出す使命をもたされている。だが、ビラヴドの果たす役はそれだけではない。ビラヴドがわが子と悟った日、セスは勤め先から帰ると、「ドアを開け、中に入ると、しっかりと錠をかけた」(p. 198)。交渉を絶っていた世間をさらに閉め出し、セスは自分だけの至福の世界にこもり、ビラヴドに愛を注ぐ。ところがやがて、ビラヴドは母をなじり始める。作者は人の形をとった霊に、母をなじりたいだけなじらせ、一方母にはくり返しくり返し、釈明と愛と許しの言葉を語らせる。これはいわば鎮魂の作業なのだ。鎮魂はもちろん、殺された1人の少女と殺した1人の母だけのためではない。作者は小説の冒頭に「6千万を越える人々」というエピグラフをつけている。6千万とは16世紀から19世紀にかけて、いわゆる三角貿易により、アフリカ大陸から奴隷として連れだされた人々の推定総数である。そのうち中間航路で落命せず、新大陸に到着したのは約1500万人と

言われている。

幽霊になじりたいたけなじらせ、自分はやせ細って消耗していくセスを救いにのり出したのは、エラを先頭にしたコミュニティーの女たちである。奴隷制下でも解放後も「1日1日が試練であり、苦難である」彼らにとって、「その日に起きた悪は、その日だけで充分」(p. 257)であり、過去は後ろに置いていきたいのだ。彼らは幽霊の交信はむりもないことと認め、その限りでは幽霊を敬うのだが、人の形をとってまでこの世界に侵入し、生きている者の命を脅かすとなれば追い払わなくてはならない、と決意する。19年間没交渉であったセスの守護に団結して立ち上がる女たちの姿は、くずれかけた穴のなかから意志を一つにして這い上がったあの46人の男たちの姿に呼応する。生き残った者どうしが1人も失われないように互いを守るのが、共に生き延びることにつながると感じている姿だ。女たちの目の前でビラヴドの姿がかき消える直前、セスはたまたま庭先に馬車で入ってきた白人ボドウィンめがけ、錐をふりあげて突進する。ボドウィンはむしろセス一家を助けているのだから、これは見当ちがいな行為であったが、これもセスとビラヴドの鎮魂の儀式のような意味をもつとは考えられないであろうか。それは19年前、追っ手の白人たちを庭先に見たセスが、急降下する鷹のように子供たちを集めてまき小屋に駆けこみ、鋸で女の子の首を切る代わりに選べたかもしれないもう一つの行為なのだから。マーガレット・ガーナーの沈黙に「文字」や「言葉」への不信を聞きとったモリスンは、公的な記録では表せない心情を「幽霊」という大胆な構想で、みごとに引きだしたと言える。

[注]

- 1) *Black Women in White America: A Documentary History* ed. by Gerda Lerner (Vintage Books, 1973[1972]), pp. 60-63.
- 2) 発音は「ビラヴィッド」とも読めるが、すでに翻訳があり(『ビラヴド』、吉田迪子訳、集英社、1990) 定着しているのでそれに従った。1988年度ピューリッツア賞受賞作品。1993年度ノーベル文学賞の主たる理由になった作品でもある。

- 3) *How I Wrote Jubilee and Other Essays on Life and Literature*, Margaret Walker. (The Feminist Press, 1990[1972]), pp. 51-65. なお、ウォーカーは20年の歳月をかけ10冊の小説が書けるほどの資料を集めた、と述べており、いかに奴隷の女性の視点から見た日常描写の先例が少なく、暗中模索の状態であったかを示している。
- 4) 独立宣言起草者ジェファソンの愛人の存在は早くも1853年、William Wells Brown が *Clotel, or The President's Daughter* (ロンドンで初刊) によって公表した。
- 5) ウィリアムズは、「反乱に加わったため絞首刑を宣告された妊娠中の女奴隷が、奴隷主の財産となる赤ん坊の出産まで刑の執行を延期された」という記録と、「ある白人女性が自分の農場を逃亡奴隷集団の隠れ家に提供していた」という記録をつないだ。前者が仲間救出され、後者のところへ潜み、ぶじに出産したうえ、女性二人で協力し、世間の常識のうらをかいて痛快な活躍をする。
- 6) 小池関夫『奴隷体験者による文学：米国1701-1865』（オメガポイント、1987）p. 12.
- 7) 小池氏が筆者の頼みに応じて算出してくれた数字である。
Marion Wilson Starling, *The Slave Narrative: Its Places in American Literary History*. Diss. New York Univ, 1946, pp. 492-505 の目録では“Separately Published Slave Narratives”の112人のうち女性は15人（この15人のなかには夫婦のNarrativeが二つ含まれる）で13%となるが、上記のnarrativesにはフィクションと思われるものや裁判記録も含まれている。小池氏は注（6）の自著に使った資料（すべて separately published slave narratives）のうちからフィクションと思われるもの、裁判記録を除き、narrativeを出した人は1865年までに68人、そのうち女性は7人（夫婦二組を含む）で10%と計算しておられる。10%~13%であるから1割強と考えてよいであろう。
- 8) 筆者は1988年12月にニューオーリーンのMLA会場でケンドリックが未出版のこの詩集の一部を朗読するのを聞き、感銘をうけた。さらに1990年8月にワシントンDCに住むケンドリックと話すことができた。彼女はニューハンプシャーのフィリップ・エクセター・アカデミーの英語教師でもある。なお、筆者は『グリオ』第1号（平凡社、1991）でもこの詩集を紹介したので、参照して頂きたい。
- 9) Alice Walker, “Finding Celie’s Voice,” *Ms*, Dec. 1985.
- 10) Barbara Christian, “Somebody Forgot to Tell Somebody Something,” *Wild Women in the Whirlwind* ed. by J. M. Braxton & A. N. McLaughlin. (Rutgers University Press, 1990), p. 336. その他。
- 11) 本文中の引用の頁数は *Beloved* (Alfred A. Knopf, 1987) によるもの。訳文は吉田迪子氏の翻訳『ビラヴド』（注2を参照）を参考にした。
- 12) *Black Women in America: An Historical Encyclopedia* ed. by Darlene Clark Hine

(Carlson, 1993), p. 815.

13) Christian, pp. 329-31.

14) 富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史』（雄山閣、1982）、p. 48.

15) 同上書、pp. 72-78.

16) Doreatha Drummond Mbalia は、*Toni Morrison's Developing Class Consciousness* (Susquehanna University Press, 1991) で、このことをモリスンの階級意識の表れと見なしているが (pp. 95-96)、先住民との精神的連帯については、アリス・ウォーカーも早くからより深い次元で描いている。今後の黒人文学でどのような展開を見せるか、注目されるテーマではあろう。

Summary

Roaring Silence: From Documents Into Literature —The Cases of *Beloved* and *The Women of Plums*

Atsuko Furomoto

It was during the winter of 1856 that the fugitive slave Margaret Garner and her family crossed the Ohio River and arrived in Cincinnati. Unfortunately, their hiding place was surrounded by pursuers, and Margaret was determined to kill herself and her four children rather than to be taken back into slavery. She was, however, arrested immediately after she cut the throat of her little daughter with a knife.

She was being taken South with her three other children when the ship was wrecked in an accident. It is not certain whether she was thrown into the water together with her children or whether she threw them into the river herself and, then, jumped in after them. Her children were drowned but she was saved. We can only perceive a great roaring in the stony silence of Margaret Garner who crouched “like a wild animal” on the rescue ship.

In the 1980s, two Afro-American literary works based on these documents were published. Dolores Kendrick focused on the latter half of the documents and produced a poem entitled “Peggy in Killing”. She took this as an opportunity to study slave narratives and many other related historical documents. She then followed the voices of the slave women she read about, feeling and acting like “a medium.” *The Women of Plums*, the collection of poems spoken in the voices of 34 slave women, is a testimony to and celebration of the strength of their spirit—a spirit which black

women of today have inherited.

On the other hand, Toni Morrison focused on the first half of the documents, and created an unforgettable story based on the hypothesis that the mother was not taken back to slavery but was allowed to stay in Cincinnati after having killed her beloved daughter. In *Beloved*, Sethe, the ex-slave of the Garners', keeps fighting back the memories of her miserable past in order to live, and to raise her three other children. But the ghost of the little girl haunts 124 Bluestone Street where the tragic event happened. After 18 years, this ghost incarnates itself as a young girl, and this girl "Beloved" begins living with her mother and sister. Such an extraordinary plot makes it possible for the characters to speak out repressed feelings which official documents would never be able to express: and by so doing, Morrison tries to repose the souls of those black ancestors who died a violent death.